

まえがき

いつもと変わらない日常の暮らしの中、目新しい出来事は何も起こらなくても、自分が感じたことを表現すれば、立派な日記になります。

奈良時代、日記はまだ記録という面が強く、法律や行政、公式行事を管理するために、役人が記録するものでした。平安時代初期、法律や行事が増えるとともに、その内容や行事をおこなう順序などを、忘れないため、個人が日記として日々の出来事を記録した文書があらわれますが、それはすべて漢文で書かれたものでした。

日記が人の心の動きを細やかに表現し、文学と呼べるものに変身を遂げたのは、平安時代 紀貫之が書いた「土佐日記」の登場によりです。そこには自分の思いを自由に表現できる「仮名文字」の誕生が大きく影響しています。仮名文字というツールはやがて日記だけでなく、日本の文化に大きな影響をもたらします。

日記の長さはそれぞれ違います。生涯に渡って書き続けられたもの、ある印象的な事件や出来事の起きた場面を記した短いもの。紀行文も旅の記録であることから「旅日記」と言い換えることができます。

ここでは、代表的な日記、紀行文、日本の古典を理解するのに必要なもう一つの力ギである「和歌」について、取りあげていきます。本書で取り上げた日記の中で、土佐日記、更級日記、蜻蛉日記の原文はすべて「仮名文字」だけで書かれています。本書では読みやすいように、漢字・仮名交じりの文にしてあります。

もくじ

奥の細道	漂泊への思い	6
奥の細道	旅立ち	10
奥の細道	那須野	14
奥の細道	平泉	18
奥の細道	尿前の関	22
奥の細道	尾花沢・立石寺	26
奥の細道	山中温泉 曾良との別れ	30
奥の細道	大垣 旅の終わり	34
コラム	歌枕と芭蕉	38
土佐日記	序	40

参考文献	119
蜻蛉日記	114
蜻蛉日記	110
蜻蛉日記	106
十六夜日記	102
十六夜日記	98
コラム	94
日記文学の衰退と貴族社会の変化	
更級日記	90
更級日記	86
更級日記	82

更級日記	78
更級日記	74
更級日記	70
更級日記	66
コラム	64
古今和歌集	60
土佐日記	56
土佐日記	52
土佐日記	48
土佐日記	44

奥の細道

漂泊への思い

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。

舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。

古人も多く旅に死せるあり。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず（中略）

松嶋の月先ず心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

草の戸も 住替る代ぞ ひなの家

面八句を庵の柱に懸け置く



月日は永遠に旅を続ける旅人であり、毎年来ては過ぎ去る年もまた同じ旅人である。

舟の上で一生を送る船頭や、街道で馬のくつわをとりながら（荷物を運び）老いてゆく馬

子などは、毎日旅をしながら仕事をしているようなもので、旅が住まいなのである。

昔の人も多くは旅のさなかに死んだものだ。

わたしもいつ頃からか、ちぎれ雲が風にさそわれるように、ところを定めずに旅に出たい

思いを止めることができない（中略）

（歌枕として有名な）松嶋の月が、何をおいても気にかかって（いつ戻れるかわからない旅

なので）住まいは人に譲り、（旅立ちの前に一時）杉風（芭蕉の弟子）の別の家に移るとき

草の戸も 住替る代ぞ ひなの家

（わびしい草庵も、住む人が替わり、三月なのでお雛様が飾られている。譲った人には子や

孫がいるのだ。わたしが住んでいたころよりも賑やかになることだろう）

（連歌の最初の）発句を庵の柱に懸けて置いた

注：これに続く句はないので、連歌の発句というのは言葉上の表現と考えられています。